

特集 「子どもらしさ」へのアプローチ

加 藤 理

1994年に誕生した日本子ども社会学会は、敬愛大学で開催された2014年の研究大会で20周年を迎えた。

20周年を記念して開かれたシンポジウムでは、「子どもの昔と今—子ども研究の饗宴」と題して、歴史的視点を取り入れながら、教育学や心理学、民俗学等による学際的なアプローチで「子ども」という存在について迫ろうとした。その中で、これまでにさまざまな領域で行われてきた子ども研究について検討が加えられたり、これからの子ども研究の可能性や子ども研究の方法論についての検討がなされたりした。

周知のとおり、本学会設立の歴史は平成5（1993）年10月9日、日本女子大学で開かれた第45回日本教育社会学会大会でのラウンド・テーブルにさかのぼることができる。「子ども社会学の構想」というのが、ラウンド・テーブルのテーマであり、話題提供者として藤本浩之輔先生、深谷昌志先生、住田正樹先生、森楸先生の4人が登壇している。

藤本浩之輔先生は、子どもを文化の受け手としてとらえがちであった従来の児童文化研究に子どもの文化創造という視点が欠如することを指摘し、「児童文化」とは異なる「子ども自身の文化」研究の重要性を指摘した。そうした視点を明確にしながらかを進める研究で、「子ども<宇宙>」を明らかにしようと藤本先生は願っていたのだと思われる。

深谷昌志先生は、大人である私たち研究者が進める子ども研究が、大人から見た子どもの分析になることはやむをえないことであるが、実証的な子ども研究がエモーショナルな部分をとらえきれない点で限界があり、子どもの生活を

子どもの論理でとらえる必要性を力説している。先生の提言に込められた意味も、今あらためて見つめなおす必要があるだろう。

以上のような本学会創立以来の研究課題を、創立から 20 年が経過した今、あらためて問い直したい。「子どもらしさ」とは何かという問いに、今号では教育社会学、心理学、教育人類学、保育学、児童文化学の立場からのアプローチを試みる。それぞれの研究領域で理解できる「子どもらしさ」についての論考を読み比べることで、他国を旅する時にも似た発見が得られることを期待したい。

また、今号の特集テーマである「子どもらしさ」へのアプローチは、次号にも引き継ぎたいと考えている。次号では今号の諸論考を踏まえて、議論がさらに発展していくことを目指して、これまでの本学会紀要では新たな試みとなる特集テーマへの会員からの投稿を募集することにしたい。特に、今号にはない、実践研究の立場での「子どもらしさ」へのアプローチや、歴史研究、医学・生物学など、より多領域からの投稿を期待している。

今号の特集では、こうした新たな試みの土台を作るために、特集テーマの内容について議論し、問題と課題の所在について共通理解を持っている紀要委員を中心に執筆した。

多くの会員から、本学会は学際研究の場となることを期待されている。これまでは大会シンポジウムやテーマセッション、ラウンドテーブルが学際研究の舞台であったが、それらに加えて、紀要を舞台にした学際研究の実現を図っていきたい。

この特集が、日本子ども社会学会が期待されている子どもに関する学際研究の成果の一つとなり、学会の研究活動が一段と活発になることを願っている。